石黒医官北征日記 丙

洋学文庫
文庫8
J304
3

石黒医監日記

十日晴朝風寒暖四十度朝飯を了り兵站司令官に辞し病室より車病患者を診す患者輸送部長星見少佐より茶碗二個を贈て曰此茶碗瑞典に於て得る所之を衣来地点より宿せし患者百余人或は歩し或は乗し或は背負はれて早朝より大東溝を経て漢陵洞に向て発す余馬車を抜き拳ち誠に坂下より又騎して進む行くこと里許田間の細路より出つ而て水溢れて路を没す後来の患者往く

東京帝国大学

軍を発さんとする者あり此寒朔足を水中に没せん
ことを恐れ馬を下り馬丁と共に石を集め悉く水
中に括入る患者をして石を踏み渡りて以て
進ませ足を温さんことを謀りて亦進む（翌日の
項に委訳せよ）遂に瓦山に達し兵站司令部に過
きて先夜一泊の礼を述へ復騎してクイン浦に向
へ西風勁く寒気に徹し乃外套を鞄に取て身
に纏ひて行く行く一首を得たり是を生来第二
首目の歌とす

虎吼る言震の暁野も大君の

恵みをてこそ行くとり旅なれ

午後十分クイン浦に達し長崎出張の高橋氏
長崎八漢陸河に赴きて去らず兵站監塩谷
少将此に居る入りて炉を囲み共に飯を喫し従
卒をして便宜を兵站部に問へしむ暫時にして
山和兵站司令官来て曰本日尽強く荷揚せ
ん能ハさ況や乗船をや須らく此処に泊して休
息せられよと云に於て行李を下し衣の埃を
拂ひ出て此地の病院に入る病者に五九八病兵蒙園集し
桑原三等軍医看護手を督して患者を

宿泊不十分酥もら最中之余ハ之を輔け後と
後れ来る患者を山陰風静なるに休せしめ而
し韓人の家に多ちて宿泊せしむ但韓人の家多く
ハ人多く之に火を焚くしむれハ火を失するの患あり
之に火を禁ずれハ寒を訴へて已まず来泉ハ
兵站部に協議し温粥数釜を煮さしめ石
炭油入の空罐に盛りて之を患者に分配して
温を取らしむ日夕風ヒみを威示ず折まれば
狂温突を焚き塩谷少将と共に寝に入る翌日
塩谷少将ハ韓人数名を集め図を案して元山龍

川の二駅を経ずして直に義州に至るの道を求
む質疑致回果して更道を得ざる前路に比
まれハ近きを二里餘之此道に由れハ連次せず
して直に義州に達することを得ると云ふ韓人曰
此道近きこと二里然れども運送貨物ハ狂
元山龍川を経るを同額を給せられよ何と
あれハ道近しと雖も労多く費多に於て八二日
を要すべきを一日にして達するの便あれハ之と余
嘗て以為く韓人時の便を知らずと今より韓
人も亦時の値ちることを知らざるに非ざるを知る

十二日晴風なけれども頗る二十五度朝飯を
喫して山和人を召して按せしむ曰今日筑紫を発
すべし朝潮満つ早く浮艇を本船に移
らるべしと因て早く装を修め塩谷少将に別れ
山縣兵站司令官桑原軍医に送られて七時
端舟に乗り波止場を発す此端舟は漁艤
船之舟子に問ふ汝何れより来る舟子曰我軍
は大分縣の者にて毎歳朝鮮海峡に艤を
漕ぎ出て業とす同舟五人今年始て平安
道の海に来り明年帰り給ふ此
度の事を更に問ふて進むて汝等此処に来る
何に拠て方位を定むと舟子曰山を見るのみ
磁石の如きは我漕舟に要せざる不し山を見て而
して舟を進めるは退くも亦山に依る衣と食とを
元足すは唐天竺に到るも亦一只恵ふ
異国は米多しと雖身を農に足らず平安道
の如きは米頗る貴し幸に御用船を以て官
米を乞ふ事を得又何ぞ憂へん只同行五人の
中其二人は已に病む又一人を欠は此舟を
行るに力なし近日辞して大分に帰らんとす十

時筑紫丸ヲ達シ之ヲ乗る病兵小舟ヲ乗ー
松下ヲ漕ヒ蝟集セ松中ヲ於テ長岡等兵
少佐福原工兵少佐冨永軍吏等ヲ達ス也
出福原の二氏ハ暮ヲクイン浦ヲ発シ此松
ヲ大東溝近海ヲ過ヒ波荒ハシテ上陸
セ也ス紙ハテ再ヒ此処ヲ帰ル昨日上陸
先ヒ欲セも又波荒ハシテ遂ヲ本松ヒ上リ知日
更ヲ漁隠河ヲ向フ也ス筑紫丸ハ三井物産
會社の舟ヲシテ楢崎伊太郎氏此松ヲ長ス
楢崎氏ハ余暮ヲ漁隠河ヲ於テ之ヲ知ル

此松ヲ来る患者合計百三十七人医員北川
進護医員ヒ松将ヲ発セントセる患者
防寒の毛布ヲ余人ヲシテ松長ヲ請ハシメテ
曰キ気甚強シ然ルヒ毛布ヲ又蒲團ヲ
有合の坐席帆布ヲ貸サンヒヲ松長頼ル
仕使布帆生席ヲ古毛布ヲ与ヘテ悉ク
尽クシテ貸ヲ即之ヲ患者ヲ覆ハシメテ曰
漁隠河ヲ至ル僅ヲ十二時暫ク怒フヘシ漁隠
河ヲ至ラハ毛布ヲ病院ヲ乞フテ与フヘシト
一患者声ヲ應シテ曰我軍昨日龍山ヲ

瓦山より途中軍医総監閣下の手つから
石を集めて道を造き我かまゝして足を水よ
湿さしめさるゝを待て感涙潸々地心を以て
之を推さハ私中被布ありて豈給さられさるの
理あらんや閣下の我軍を恤ること極ての熱情
ハ彼の石を下さゝるの一事を以て知るへきのミ
漢隱河より五里の間豈寒を訴ふ可んやと
余北語を少赤心人を感ずるの意外なるを
悟る
午後七時私将ト発せんとするの前帥舟子皆
俄ト小舟を小嶋の南ト集む曰午刻必北風
強るへしと本私錨を揚け駛するを数刻
十時半ト為て北風力を加へ船動揺すること
甚し果て偉人の言の如し十二時風息む大私
五度燈を揭て駛するト遇ふ赤我運送私
の漁隱河ヶ浦ト向ふもの之此日ニ没し
り甲板上ト滴るもの水皆氷結し甲板恰も
鏡の如く滑役辛苦を極む
十三日晴海平ト砲の如くを嘆計三十一度
八時半舟漢隱河ト達を小汽私ありて幸ト私の

側を過ぐ呼て之を乗り上陸し兵站部を置く
先日の御辞を述へ且此地新に兵站監部を設置
せしを少将部に乗り兵站監福原少将同参謀原
田大佐軍医部長山田一等軍医正を招き
之と共に軍医部に乗り中食を喫し荷物の多分を
此に為す午後三時田中副官に導かれ小流船に
依渡国丸に搭し依渡国丸は品川田沢某の
所有にして浜谷孝一此船に長く此船嘱数十
餘噸軽便鐵道の材料を積み横津に向へ
船中松尾巳代三郎に遇ふ松尾は明治十年の役

紀州暮兵を率ひて西南に従軍し負傷
して余り治療を受け今度の役壮志勃し禁ち
る能はず軽便鐵道架設人夫を率ひて来
れりと云
夜船室に入りて書簡を認め廣嶋並東京に
発す
十四日朝四時度曉起錨を巻くの声を聞く
其将に発せんとするを報ずる時に汽船駛せ来
りて出帆を止めて曰船中積む所の銀貨を揚
陸せへと因て船室騒然午前十時に至て

銀貨を投げ去り十時半船投錨し大同江を溯
る船進むこと一時半ホ丘連りて両岸を夾み幅
里許水色泥の如く洪濤海のかし漸く進むに
従いて両岸相近く家屋辨ぜべきも狡城の
内海を行くが如くさも大陸続きの大河の
を語るが如し是より午後二時ヨリ江流屈曲一山
角を繞りて俄に数隻の大船碇泊左岸に数
個の假廠及天幕の連るを見る楼津是なり
右岸河口に沿ひて只桟橋ありて家なきまあり
是を十二浦と称し此に碇泊する最巨大の船あり
新驛の荒見嶋丸と船既に錨を投じ端艇未
至らず遠に小汽船の駛するを見るこれを招けども
至らず雲霧時に一小船の近るあり之に名刺
を托して艇を司令部に乞ふ少時にして兵站
司令官騎兵少佐山縣則顕小汽船に乗り
来り曰く議院議員犯塚龍を送りて某船
に乗ると少時の後更に本官下を迎へんと此に
於て余船梯を下り船を隔て犯塚氏と語
り其兵二軍に赴くを少甲板に帰りて山縣の
更に来るを待つ

午後四時山科本邸に到る松長と共に陸上る三等
軍医木村雄看護長等と共に機橋に向ふ
共に兵站司令部に至る兵站司令部八幡人
の家を假用せるまゝにして其廣さ凡十畳
山縣を首として部員皆此中に立て事を
執る此地患者集合所を設け平壤より小浜松
にて送り来る患者を更に大浜松に移し以後
送る所の患者の輻湊せるや天幕
看護者共に足らず頗る悲状を極めしと
の説八曾て耳にせる処なるを故に心甚安んせ
ず

早く木村軍医を伴いて病室に赴き入へしに
戸を出ル木村曰天見三等軍医病して此部
屋に臥せ直に往きて之を診せよ熱病にて
極らず此を以て山後の病室に移る病室點
く天幕数個を張りて以て患者を分居し幕
中夏草を敷き上に蒲團を敷き之に患者を
臥さしむ看護長看護手之に付き木村此に
赴任せし以来後送患者を後送し熱心整理
せしを以て患者大に減じ今僅に重病者四人を
入るのみ故に其居八則天幕なるも蒲團暖

ゝして看護亦萬く一見以て心を安ふするを
得り病室を人終りて司令部ゝ帰り山和と共
夕餐を喫す山和の僕類ふ剝烹ゝ巧ゝ茶碗
蒸を裝て之を供す余驚きて曰何ぞ図へ
此地此味あらんとハと山和曰人ゝ使ゝ其才を
撰て此のわさを易ゝるのみ食後端舟よ
為て寶国丸ゝ上る寶国丸ハ横津より義景
墓ゝ立るの通船ゝて満潮ゝ往きて満潮ゝ帰り
を常とす同船ゝ乗り赤十字社派遣員トクトル
毛利伊賀谷田本三大坂の写真師佐野景明

等ゝ逢ふ皆平壌ゝ行くものゝ九時寝ゝ入る
松江を汽船を発一時間甲板ゝ出て四方を望
む輪月水涯の山上ゝ愁り風景画の如くき
尽戦の如く早く松室ゝ入りて休す
十五日晴朝二十五度午前二時松蔦景墓
ゝ悲きれども亦烈しきを為め陸ゝ上る者
多く天明を俟つ六時起きて甲板上ゝ出ハ
霜雪の如く松中朝飯を喫し裝を整ふ端
舟を職て来る者あり呼て曰石黒湧生長
官在るやと舟子應へて曰在りと其人急ち

船より余を船室に導て曰司令部より来り
迎ふると乃其船より上陸せ兵站司
令官大原工兵少佐副官と共に桟橋に迎ふ
此地人家わづか仮屋四個天幕四張以て兵
站事務を執るのみにて大原の幕に入炉を
擁して語る大原曰此地川に演し寒事試に防
寒的の仮屋を作り又二重天幕を張り二者
を比較するに二重天幕は遙に仮屋葺の仮屋
よりも暖なるを覚ゆ蓋大原工兵科なる故に
家屋の事に就きては特に考ふる所ありと

嵩景臺は大同江に演し模津より小汽船
(凡五百石積)にて溯れば此臺を以て止るの不
とて満潮の時は小なる汽船は平壌の大同門
外に達するを得べけれども常に傾沙の恐あり
故に此地人ありて非れば此処に兵站部を
置き桟橋を設け軍需品揚陸の要地とせ
漢隠河より大同江を溯るに両岸皆山僅に
平坦の地あるも赤頁なる山を以ても此地に至
る右岸山なく左岸一角の山を以て終る
山角の上朱楼あり嵩景臺と名つく左連

山終る処平壌を尺右及前面ハ大同江流
を後らして沃野千里眺望際なく最絶
景之大原曰閣下何故ニ馬を牽き来らざ
るや又何故ニ部隊を伴ハざるやと余曰彼地運
輸ニ困難ニして戦隊の兵馬食ニ乏きハ常ニ
耳ニする所之余輩幸ニ徒御其騎を処の
もの減して之を戦闘隊の軍馬ニ食ハしめ
んとを欲して之部隊のおきハ余の災案ニ用ふ
きこと別れて徒歩途ニ上り毛利午田諸氏
と共ニ平壌ニ向ふ途を挟むの畦圃玉蜀黍
黍ニ烟草多し平壌の役敵黍圃ニ隠れ我も
亦之を利用したるを想起す路傍の人戸
人の住まざる者ふく或ハ破れ或ハ焼け乱後の
惨状を現ハす行くこと里許一砲壘あり清軍
の駐屯せし所之壘中狼藉を極む尚進みて
近く平壌を尺る忽騎を連て来る者あり馬
を下り恭く徒を育馬二等軍医三中村一
等軍医ニて共ニ久く平壌ニ立て医務を
執る者之夫立ち来る馬ニ騎り妻を騎へ
て平壌の閭門ニ至る閭門額を掲く曰朱

雀門を門とし門ハ往人及邦人肩摩轂擊
雜沓を極む兵站司令部ナルものとして
直ナ兵站軍医部ナルもの兵站軍医部ハ西
營軍の營ニ在て結構為されたる家
屋大之為ナ軍医部及ひ病院の一部を当き
病院の一部ハ赤十字社の派遣員をして之ニ当
らし地地在陣の清生將校各〻来り人ヲ
直ナ午飯を喫し出て兵站病院ナルもの病者を
収容を地地晨ナ患者輻湊すること千餘名衣
衾乏く看護者も亦足らす戸一軍出征以来
病者の不幸を人〻と地地を以て其最とす
云有馬二等軍医正地ナ来り鋭意之を整理
し遂ナ患者をして憩ふきナ至らしめ其後
後送の令ナ遇ひ漸く後送して今僅ナ生疵
者八十餘名を餘せり病室を収容するの際一
人夫病最も甚きものあり命旦夕ナ迫る余ハ之を
診せんや手を握り眼を開き余を謝して曰
一度閣下ナ診せらるる死も亦畏怯ふ所ニ非ス
役ナ於て地地ナ生るあらされハ病むとも閣下ナ
診せらるへしと涙言を共ナ下る又

語を沢さて曰昨来身少し安し知らせ閣下
此地に留らるゝを尚幾日なりや幸にて狂談
せらるゝを得ば或は生を為て得て郷に帰
るを得るとなん余慰諭して曰余狂然爽
数日を経へ明日復た来り診せんと尚之を慰諭
せんと欲するに涙落ち声咽ひ語を次くを能はず

病室を出つ

一病室に入り赤痢患者を診せ不回想起て
有馬に語て曰余赤痢患者の屎紙に接せ
急り暴に東京に帰て此事を新聞に訴へ
世上の有志復た流れを返し紙を寄送し易
関貨物敵に堆積せ然れども運輸の不便なる
仁川に急り止りて此に来らも失日安東和に於て
分捕の唐紙多し僅に携へ来て茲に立り次
て赤痢患者に与へんとも知らず今日に至る迄
何を以て之に供せしやと有馬曰く幸に分捕の
故紙あるを以て其用を辨じ一患者枕
辺の故紙を指して曰是なり余一尺其尋常
のものにあらざるに驚き取て之を視れば三百
年前の戸籍にて紙質体裁字字の妙

真に好古家の珍書とも〻べき書なり古書古
物戦乱に遭遇して皆亡き余久しく其語を少
今其愛を目にして嗚呼兵革の憂に悠ある哉
病室を廻視して兵站司令部に至り水野
中佐加藤少佐に面して帰て赤十字社派遣員
の撫恤を病室に及ぼす軍医部に帰る
十五日薄暮水野歩兵中佐加藤砲兵少佐来り
話す此地第一軍兵站部の最要地にして最も兵
站監部を設置せらるる由後該監部ハ
義州に移され今ハ支部と兵站部とを兼
ねて兵站司令官を兼ねかの兵站監長
謀りて此地に於て此地兵站部に於てハ専ら
糧食を運搬し且盛に近地に糧食を徴集
す就中大豆最多し加藤少佐ハ之を以て味噌
を製し又得る所の牛を屠り塩漬とし以て
方に送るに余其心を用ゐる功多し
之を持し帰り廣嶋に到て僚友に示さんと
欲して味噌塩肉各一樽を携へて帰る
午後清生部員陸続来訪す接して

五十款語を最と恐るる所の赤十字社員一行
此処より赤来迄も此処往患者輻湊して
繁忙を極むるの際該社員能く之を補け
類う患者の幸福を増せりと云寝に入るの前
中村軍医其秘蔵せる羊皮を出して之を敷き
しめ又温灸を焚りしを以て徹宵温眄怠る
春夜の如し五時半頃と欲して戸を出ハ
寒威凜冽肌を逼る因て思ふ殊更に温を増
さハ又殊更に寒き是まるの媒となる所謂好て一
楽を得ハ却て一苦に達ふの媒と成るもの

十六日晴朝平壌三十度朝赤十字社派遣看
護夫の二氏の葬儀あり二氏共に久く此地に
より看護に従事し病没せしもの余為に舎森
氏談社員医士に為る木村松氏祭文を朗読次に
者知組の役夫長某牌前に向て和歌を朗詠も
日唐国の土となるせ丈夫の名を国に残も
玉垣と余其通常役夫に非るを察し後に名
を問ハ曰京都府士族高橋則見なるものと
帰て郭門を出て其子陵に詣つ碑あり墓基関
泳駿建る処の碑最に詳を誌す問く古碑

あらしと而て今八則立し近年廟祠を建設し
瓦屋彩宇松林の中に立り殿宇蒼かくさるも
山色古雅陵を拝し下りて淡蒼路を入郭
門に入りて奉軍の旧営を過く此邊皆て歇展
山てあるこるを不知八今八已に埋葬せりと雖も此
変を過ぬ八往々焦屍の臭を遺す碑墓を歴
視し乙窩窩に上る墓八平壌最高の丘上に立
りて方僅に三四間なれ共石柱丹棟登陟され
八大同江を眼下に流れ茫々たる沃野一眸千里
豆人寸馬點々数ふへく大同門に通ずる一道
長く連りて帯の如し大王陵の松林を望み
前に牡丹の高墓を衣る加之牡丹窩下の寺
宇眼下に点綴し展光絶筆なる而已ならも
此処に来るの歇兵八一夫も眼を免ること能
八ず想起す大嶽少將を旅團を率ひて
四面より大同門に向て進攻最苦戦し將卒
多く傷きこるを故ふきに非ること窩窩を
下て郭門を出馬より下り山崖上の危路を歩
し牡丹窩を一見し左寶貴を弔ひ嗚呼文
兵以来清將の現に高き者十数人官貴く爵

高きも一も身を殺して以て國難に殉せし者あり
独り大氏城を守り終に我砲弾に斃れし軍
漬ゆ欲將ふるに以せ、豈一掬の水を供して弔
せざるべき得んや牡丹臺を下りて七星殿に
詣ずに尺之を守る言語通せざるに及び
尺銭を乞ふ即銀銭を与へて去る殿外古塔あり
六面に佛像を刻ず石古くして文字を蔫せず
蓋五六百年のもの乙又浮碧樓に上る樓八大同
江に臨み浮碧の名実に立つ古今の文人
額を掲くる者頗る多し人夫を側に立て此彫額を
折砕し焚きて以て暖を取る金若干を与へて二
枚を購ふ樓傍又五層石塔あり高さ約三米
雖正歩まへし亦時代三百年を下らざるべし更
に永明寺を訪ふ安置する所の佛像壁に掲ぐる所の
佛画皆古からず寺僧二人之に侍す一僧病り切に
某を乞ふ蓋朝鮮の俗多く八本邦人を厭ふと雖
医薬に乏しく八本邦を以て最上の者と信ず
殊に我軍医各兵站部に於て職務上人の病を医
し以て我皇化を洽ねくするの一助となすべし故に傳生部
員の徽章八殊に早く彼等の識別する所となる

ハ見我軍の軍医さるを知り茲ニ薬を乞て
止まる同行の有馬をして其之を告らしむ之を出
て湯月楼ニ上る走廊雅潔江を離ること数歩
ニ立り真ニ其名ニ背らさるなり楼ニ一鐘あり銅色
蒼古愛すへし楼を出て舊路ニ向ふ仰ぎ見る穴
豊ハ一ツの石豊ニ高く平壌を周り其一角豊石
最高きハ朱閣聳ゆる者是即乙密豊之而して
其尾屋の一角砕け棟半ハ墜ちあ蓋我砲弾の命
中せし痕ふかし歩して閣門を入り孔廟ニ謁す廟
ハ新築まして古からさ蓋之と魚も其構造彼の古
雅舊朴あるを及ハさるを遠し
平壌の地ハ大同江ニ枕ち一丘ありて大同江流其
二方を繞り豊石郭をなして市街を抱り門五
あり曰玄武曰朱雀曰白虎曰青龍而して其南ニ
向ふもの之を大同門と云此五門を鎖ハ別一支
も府を出ること能ハさるこ而して尾屋の数ハ義州ハ
ハ多からされ共猶ほ其戸数を数ふ八万ニ義
州ニ陪す楊閣寺宇名所古蹟のなきを不優
劣と称して可之余幸ニ有馬軍医より平壌誌
の零本を得て之を読む特ら天然の景光

のみにして人工の尽流も亦此地を以て絶国に一
とふまじとハ誌中往々数々ありしかるに今や乱後
春来て人々古詩に所謂宮女如花満春殿
只今唯有鷓鴣飛の感を起さしむ午時高
十帰り駕して巡覧し四時高十帰ル八
重信の茶きらもの二丈一を模津の山和ゝ一他
の一を日和の木村ゝを共十日明日荒見嶋丸此状
を発き今夜寶田丸萬景亮十五人一之十
搭て此地十帰り更十荒見嶋丸十便乗せられ
と依て急忙行李を收め役夫をして急送せしめ

自ら詩して美景亮十向ふ朱雀門外にて中村
有鳥誌氏十別れ舊路十上る日已十西山十春き
徊衣寒を加ふ昨日来騎せる処の馬ハ小池一等
軍医ふの此地十遺さるのものにして馬丁も亦小池
の僕ゝ馬上僕ゝ語り盛十美景亮の山頂を望
烟の中十中ゝ馬十任せて行ゝ千里の外知友の馬
知友の僕尚茂多相思の情あり況や友角
を中況や同僚を中れ會ふ毎度十握手涙
失れ促さるあ故おきて非るゝ漸く美景亮十
達一失埔頭を出て未ゝ寶田丸の来るを

人を因て天幕を辿りて大原司令官の幕に入
其由を語る司令官曰桂津の駅往〻中途に
泊り時を誤るまゝ十五六今夜未だ知る可き
此幕中に来て休せらるゝと因て馬を迫り靴
を脱ぎ幕中に入り莚席に坐して休息を請
まるゝ少時幕外声あり直に戸を排して入る
中村軍医之石坂軍医長の電信を持来り答
信を与へて帰り去る大原司令官憲之此地兵站
の事業を語る中言へるあり此地暴に住人
使役に就く者数〻役銭随て高騰し今や

日に集る者殆く二千人而して一日一人の役銭凡
秋六十銭米三叺を平壌に運送するを以て一
日一人の業とす日長ければ一叺を負ひて一日
三回平壌に往る今や日短きを以て午前二叺を
負ひ一回午後一叺を負ひ或は午前米一叺を運
び午後麦一叺を運ぶを以て一日の業とす
〻住人を使役するに高を注ぐ可らざるを
此の如く俱米一叺は精米二升を入れ麦一叺は
三升を以て充つるまゝ一人ある茶〻来り訴
へて曰余は石工之何れに行くべきやと而して其不

屬日給行先并に未定を書せず只言ふ然
本の産みて御用の為め備はれ新方と共に来る
而して新方の姓名不立を知らず由て暫く此処
十留めて其行先を尋ねしめんと人夫溫所に
立て命を待きしむ此者日に数人来て変
当を仰く兵站部の労又思ふへし夜半寒
益加る即炉火を加へて其側に卧す此地酒保
あり人夫の需に應ず酒一合價十二銭之を他
推知すへし
十七日晴朝二十五度今朝二時頃流氷来りて
浜留を発し前湾に投錨す大原氏曰必寒国
丸の来るあらんと朝起きて幕を見れば霜降
も雪の如し樊四丸の前湾に泊するを尋て後辛
して喫水を取来らしめ盥嗽しるして之を地に
覆せば忽氷を結ぶ偉人漸く来て幕外集
る
大原氏安田副官余三人炉を囲みて朝飯
を喫す大原安田支氏僧を共に共僧奇
古最も喜ぶへし之を大原氏に質す曰洪
州より持来るものにて元寺院の什器にて

ある哉尽十五字の透しあり猶十供ゝるまハ蘿
蔔の味噌汁と塩鱒之塩鱒ハ今朝始て荷を
開くまゝて其味の新きを貴き飯後幕
を出て伸人の荷を運ふを人ゝ兵站部の吏
員已上此業を熟し整然法あり其法伸
人の中組長と称すへき者已の名を大書し
其隊合の者十数人の名を連書せる一紙（甲）
を携へて吏員ニ出せハ吏員ハ其組長の名と
之に属せる運夫の数と運ハすへき米叺数とを
書したる一枚の紙を携へて荷物集積所に走り
米叺を伸人夫の数に応し乙の一紙を其
組長に授け米叺を平壌に運ハしむ平壌司
令部に出ハ平壌の吏員ハ其乙紙を受仰し
て之を其組長に返す組長之を携へ帰り之
を諸々の運夫に賃錢を受け組下に頒つ諸々の夫
同じく概略此類之而して途中米叺紛失も
ハ組長其責に任ずる之
午前十一時潮満ち疾く午飯を喫し変田丸に
乗して十二時萬景臺を発し右舷岸上に
景色を望み左舷ハ茫々たる沃野楊柳連

之而民家多く点々白衣の佳人を入れて恰も
明人の図画の如し萬景高を離るること二里余
にして水色漸く濶り氷勢益洪蕩船上後
顧すれハ遠山一青天涯に入く両岸枯葦の
間鴻雁群をなす中に松長船を傳ひ短艇
を借りて一発雁を中つ松長船を傳ひ短艇
を下して文を捕へむ雁羽揚すること能ハさるも
水を泳ぐに妨なく短艇之を追ふ容易に捕
ふるを得ず追ふこと凡一時間餘にして捕獲
するを得る所之雁ハ羽翮の一部を傷く
のみ僅に傷つけ得ざるに過ぎるに時ハ追ふて
却て労を取り收支償ハさるもあり好例と為
すへし午後四時船中にて晩餐を喫し五時模
津に達し先づ荒見嶋丸を下ハ已に発して
立ち去る大なるを失ふ木村軍医ハ舟に乗て
来り迎ハ山和少佐機橋に迎ふ兵站司令部
に到り話すること少時荒見嶋丸の已に発したる
少き寒風丸昨夜繋して萬景峰に泊する
を見て遂に荒見嶋丸を失発せしめたるを
恨む尋て木村軍医と共に新築の笘葺

ナルヿ宿モ炉ヲ隔テ木村ト對話一夜ナ時
寢ナ入ル須臾ニシテ山和少佐来テ坐ヲ枕
島ナ占メテ曰今藏事ヲ了リ故ナ来リテ好
話ヲ聽ケトモ失ヲ懷ク一罎の酒ヲ出シ
余ノ下戸ナルヲ知ルヲ以テ杯ヲ余ナ侑メテ一話
一盡自ラ酌ミナ二杯半ナ盡シテ帰ル帰ルナ臨ミ
テ磁碗一個ヲ出シテ之ヲ贈ル曰此地の舊家
李陳蓋の珍藏ヲシテ古代京畿道廣
州楊根郡粉院の窰窯ニテ作ル所之ヲ云古色
愛ヲヘシ

十八日晴朝三十七度朝晨ナ山和少佐ナ於テ韓婦ナ
縫ハシムル韓服ヲ持来ル韓人の表衣ヲシテ俗ナ
ソルマキヲ名ツケ雅ニチユーイ（周衣）ト云韓婦ハ
下の別ヲ深ク深閨ニ鎖シテ外ナ出テヲ裁縫
ヲ勉ム故ナ裁縫ナ巧ナルヲ驚クナ堪ヘリ
頃日山縣ト談此ナ及ヒ遂ナ根津の一民家ナ
托シ夫婦ニシテ日ヲ期ヲ三日ニシテ一衣ヲ
縫ハシムルヿ夫ノ田舎婦の縫ハ不ルル所ヲ東京
仕立職の縫ハ不ルヿ多シ之ヲ家ナ送テ我
小娘の裁縫ヲ學ブヿ念ヲ奬励セシヿ木村

軍医と共に病院に至る病院八畳二棟を
以て之に充て最初設置ここに天幕八悉皆
之を撤去り入院患者人夫四名輜重卒一
名に
此地水に乏し故に不日の井を穿掘し蓋賄所
に立る者八水量少くして没尽もとなるを以て
此変を距ること十五町山傳の一村柳岡秀つ
る不一井ありて村婦之を汲て之を没む皆甑を
釣瓶とし汲て壺に満て之を頭に載きて去る
其水清澄量亦多し然れども道遠くして兵
站部の用に供するに便ならず止むを得ざるに
韓人の井工を徴して新に井を穿ちこれを往て
三人に人夫三人一鋤を用ひ其技頗る妙之帰
て兵站部に乏し海津大尉は漁隠洞行の
船を向ふ海津氏曰碇泊するもの小官丸三
河丸ありて皆無事丸なり大之今多事丸漁
隠洞に向て発せ然れども船体破小なるを以て
猶一日を後にして他の大船に移らるべしと余曰
船の大小敢て問ふ所に非ず今多此船を以て
下らんと五叉山和木村諸氏に辞し無事丸

十上る六吋横津を発し九廿十分渓隠河に達せ
月明かに恰も晝の如く歩して病院に至り軍医
部の戸々叩く看護長戸を開きて應も坐に入て
山田軍医長の在否を問へ八日日来赤痢に罹り
今多頻り艱むと直に其病床に就きて之を
診まるに病むこと未だ久しからざる病候
良からず悲しく其撰生を示し別れて御屋
敷に戻り戸を押して中に入れば浩谷軍医正林大
塚の両軍医中山医学士緒方赤十字社理事
等已に寝に入る者驚き起き例に炉火を挿し
余を迎ふ生を炉辺に占め談話数刻炉辺
各毛布を被りて寝に入る浩谷氏と枕を
併へ山田の病状を語りて其豫後の良ま
らざるを憂ふ（山田十一月十日廣嶋に帰り
没し）

十九日晴朝四十二度此地山を負ひ海に面
し渓隠河中最も暖なる処朝起盥嗽せ
んと欲するも敢て寒を冒さるに食後
福原少将原田大佐に訪ひ野田野戦監
長官に戸二軍に発し電報を入て戸二

第の近況を審にせんと又児玉石坂落合等の
電報を接し之を答電す福原と田共に舊
知談真に入るもの多し去月三十日此地に為
せしより此地軍に兵站部の設あるのと故に
假廠天幕僅少に過きざりしも来兵站監
部及び運輸通信支部も此処に設けられ
假廠倉庫の類僅に二十日間に増加せるも
多く一見殆と観るに堪へざる病院に帰し後
山田を診し昨来下痢減し祈力加り自病の
軽減せしを訴へ感謝を公和を談じ余診案了
りて狂心に安からざるものあり渋谷及中山を召
して診せしめ治方を高議し山慈姑粉及砂糖
を行李より出し其従者に与へて其食に供せ
む十二時兵站部より午後宣和丸仁川に向
て発せんとす告げる午後三時福原と田
渋谷林石田中山緒方大塚の諸氏に送られ
波止場に至て別る小浜松に乗し宣和丸に
到る宣和丸は炭鑛鉄道會社の有にして和
歌山和人林鶴吉氏之に長たり此日此湾に
投錨せるもの八艘皆千餘噸の汽船此海面

平ナレ波立ツモ四時錨ヲ上ケ湾ヲ発ス

二十日晴朝起甲板上ヨリ出ル波平ナレ四方山ヲ尺ス午後右舷ヨリ山ヲ尺ル漸ク進ミテ信川ヲ距ル十五哩一舷大舷ヨリ撃発ヲ尺ル

諦夜ヨリハ信濃川丸ニ進ムヲ数哩又一舷ノ生礁ヲ見ルヨリ大舷ヨリ尺ル諦夜ヲハ最上川丸ヨリ

ヲ舷伝礁既ヨリ生ノ折れて二ヶ所ヲ漸ク進ム

五時月尾嶋ノ前ヨリ投錨ヲ一小汽船側ヨリ来ル其船ヨリ高ル砲兵軍曹某来ル余ヲ迎ヘテ曰兵站司令官伊藤砲兵中佐特ヨリ此船ヲ

来リ迎ヘ一ヶ月ヲ之ヨリ奇ヲ上陸ヲ北村軍医ニ等皆波止場ヨリ迎フ外国軍艦此ヨリ泊ヲ者

美一佛一米一支代我運送船六ヲ尺ル本邦人来テ此処ヨリ商店ヲ開ク者多ク日本ノ居留地ヨリ到ル人情モ本邦ヨリ帰ルヲ思ヒ波止場ヨリ堆積ヲ荷物ハ軍需品ヨリ商品ヲ多ク是商估商品ヲ此ヨリ奥ノ此ヨリ代ヨリ輸送ヲ便ヲ以テ此ヨリ堆積ヲ尺ル

ヲ此ヨリ清商此ヨリ跡ヲ絶チヲ以テ大ヨリ我商況ヨリ活気ヲ添ヘ云北村氏ヲ共ヨリ

兵站司令部ニ為リ伊藤氏ニ面シテ病院ニ為シ
病院ハ公園内ニ新ニ数棟のバラックヲ設ケ酒店
ヲ以テ事務所トシ写真屋ヲ以テ手術所
トシ作戦器備ハ為ス入リテ北村氏ニ
藤川一等薬剤官隠岐三等軍医篠原
三等軍医以下医員看護長ニ職事ヲ
訓示シ燈ヲ携ヘテ一ト病者ヲ巡診シ
テ夜半北村氏の室ニ入リテ寝ニ就ク